

愛はブルースのように

zennosuke2012

1. [本文](#)

第一話「指輪」

その店に入ったのは友人の紹介があったから。「とっても広くって、音がいいの」と、僕にとって殺し文句のような理由でその女の子が誘ったので行ってみるしかなかった。なにしろ僕の仕事は音響オペレーター。それも、単純な機械操作の仕事だけではない。たとえば、ライブのできる店を作りたいからどんな構造がいいのか、音響設備を購入したいけど何をどう注文してよいかわからない、というような相談のほかに、演劇の台本を渡されて効果音や音楽を依頼されたり、CATVの番組用にオリジナルの音楽を作曲してくれとか、とにかく何でもやる「ヨロズ音響技士」ということになっている。もちろん、たまには都会からやってくる著名な音楽家の音響操作の仕事も舞い込んでくるけど、音響の仕事がないときは小さなギャラリーの受付アルバイトや、ライブハウスや舞台の裏方のアルバイトなんかもしている。そんなわけで、この町にある「音のいいところ」は、すべて確かめておく必要があった。でも、どうしてその子が僕を誘ったのか、店に行くまでわからなかった。

その店は、二千坪くらいの公園から商店街のアーケードへ抜ける通路の途中にあって、しかも二階だった。初めて行ったとき、玄関の幅三メートルもある階段がライブハウスには似合ってなくて、本当に音楽やる店なのかよお...と思ったけど、中は本当に広かった。音を遮るための二重のドアを通ると、奥行き二十五メートル幅十メートルという四角い店内に、アメリカ製のスピーカーが左右に四個ずつ積み重ねられていた。そのとき掛かっていたハウス系の音楽が、けっこう深みのある音で鳴っていたし、ロックだろうとボーカルだろうといい音で再生できると思った。そして僕は三分間ただけでその店が大好きになった。店の名前は「ヒップ」といった。入口横に斜めに据え付けられたカウンターの高いスツールに腰掛けてハイネケンを注文した。黒いキャップのバーテンダーが緑の小瓶を小気味よい音で栓をあけて出してくれた。

「お客さまは、初めてですか？」と聞いたので、紹介してくれた女の子の名前を告げると「ああ、希美ちゃんの知り合いですか。じゃ、真藤健市さんですね」と僕の名前を知っていた。それも僕の仕事が音響屋であることも話していたらしい。「オーナーを紹介しておきます」と奥の調理場らしい部屋へ声をかけると、青い光につつまれた四十歳前後の男があらわれた。説明しておく僕には奇妙な感覚器の異常があって、目の前にいる人の身体が放っている光が見えるときがある。たぶん多くの人が「オーラ」と呼んでいる光だろうと思うけど、自分の体調の変化で見えたり見えなかったりするし、また見える人と見えない人がいたり、同じ人でも日によっても見えたり見えなかったりする。それが何なのか最初は悩んだりしたけれど、不定期に現れる光なので大して気にならなくなった。一番多くその光を見るのは、舞台上で音楽を演奏している人だけけど、観客の中にも強烈な光を出す人もいたりするので、誰がどういうときその光が出るのか確かなことはわからない。ただ、ときどき人間が放つ光をみる、というだけのことだ。

オーナーは僕の顔を見るなり「希美さんは、まだおいでではありませんが、これを差し上げてくれと頼まれております」と未開封のシングルモルト・ウイスキーの瓶をカウンターの下から取

り出して置いた。その用意周到な無駄のない動作は映画の一シーンを見ているようだった。「ストレートがよろしければ…」としかけたので「オンザロック」と答えると、グラスを冷やし氷を取り替え栓をあけて注いで差し出すまでの動作も、まったく淀みがなかった。「どうぞ」とコースターに置いた手から、青白い炎のような光がぼっと立ち上がったので、思わず唸りそうになった。この人はどうして光を放つのだろうか？

希美とは五年くらい前からの友人だ。この町から巣立っていったバンドの追っかけを希美がしていた頃、彼らの音響の仕事を引き受けたことがあって、小さなライブハウスで知り合った。希美はちょっと不思議な感じの娘だ。無口なのに笑顔がよく気持ちを語っていると表現したらわかってもらえるかな。きっかけは指輪だった。僕が音響のブースで開演前の音チェックをしていたら、「ギターのアンプ…足りないんじゃないですか？」と舞台を指差す娘が近寄ってきた。彼らのマネージャー役の男を呼んで確認すると「あっそうそう、エレアコ用のアンプが来てないや」とあわてて楽屋口へ駆けていった。「希美です」と自分の名前を名乗り僕の音響席のとなりに居すわり、ライブがはねるまで黙って聞いていた。アンコールが終わって客がまばらになり始めた頃、「ねえ、指輪ってどういう意味だか知ってる？」と訊いた。「えっ、指輪」「そう。あのメインボーカルの男の子から指輪もらったのね、一年前に。それで考えてるんだけど……わからないの」どうしてそんなことを尋ねるのかとと思っていると「誰に相談しようもなく……」と悲しそうな顔をした。僕は思ったままを答えた。「指輪ってさ、約束じゃないかな。たとえば、いつまでも貴女を愛していますとか」「……………」希美はしばらく指輪を見ていた。すると、指輪を外して僕に差し出した。「これ、あの子に返しておいてください」突然のことで僕は啞然としてそれを受け取っていた。「どうして？」と訊くと「あんな素敵な音楽、わたしなんか独り占めにはできないもの」と作り笑いの顔で去っていった。

それ以来、希美がそのバンドの追っかけをやめたかどうか知らない。その年の暮れ、そのバンドがメジャーデビューのためにやったお別れライブで僕はふたたび音響の仕事をした。その全部が終わってステージの片付けをしているとき、希美が現れた。「あのときは、ありがとう」「別に大したことはないよ」「よかったら、今夜のライブのことを話してくれませんか？」「いま聴いてなかったの？」「ええ。どっか場所を替えて飲みながら話してもらえると嬉しいな」……断っておくけど、そのとき僕は四十三歳で妻子もいて、希美は本当に彼らのライブのことを聞きたいのだった。変な意味で誘ったのではない。僕はあっさりオーケーし、近くの居酒屋でチューハイを飲みながらライブの一部始終を話してあげた。僕の話を楽しそうに聞きながら、希美は黙って瓶入りのカクテルを飲んだ。そして最後にこう告げた。「やっぱり指輪を返してよかった」

ヒップという店は面白い店だ。店内にはスタンドでライブもやれる十分なフロアがあるのに、普段はそのフロアに七つほどのテーブル席を並べている。客の入りはまあまあで、若い男女に交じり中年のスーツ姿も何人かいた。音楽もいろんなジャンルが掛かるし、センスがよくて飽きなかった。僕はジーンズと化繊のジャンパーにスニーカーと黒いキャップで、どこから見ても舞

台や音楽のスタッフ然としていた。

「お客さま。いかがですか、この店」とカウンター越しにオーナーが訊いた。「悪くないですね。音的にも、雰囲気も」と本当のことを口にした。こんな場所でお世辞をいっても仕方がない。オーナーの青い光が気になって顔をよく見ていなかったが、見ると初めて会った気がしなかった。「どこかで会ったことがあります？」と訊いた。すると「昔、何度かお会いしたと思います」「えっ？ どこで」「ライブハウスで」さらに話そうとしたら、新しいお客が数人入ってきたので「ちょっと失礼します」と彼はフロアへ出た。

ところで希美は、何のために僕をここへ呼んだのだろう。年に何回かライブやコンサートが終わったあと音響の片付けが終わるのを希美が待っていてくれて、そのまま軽いリキールを飲みながら音楽の話をするという付き合いが五年続いていた。希美は本当にライブが大好きで、いきいきとした表情でさっき聴いたばかりの音楽について語るのだった。しかし、今夜はヒップで演奏がある様子もない。たまに、僕が仕事ではないライブに誘ってくれたり、コンサートのチケットが余ったからと、意外にいい席で一人で聴いて、演奏が終わったらゲートで待ち合わせして飲むこともあった。しかし……いや、待てよ。希美がライブやコンサート以外で会おうということは、これまで一度もなかった。いったい今夜は……。酔いが回ってきた頭で考えることは苦手だ。それもプリンスの新しいアルバムが掛かっていて、時流に反したスローテンポながら斬新なリズムが流れ始めたのだから。店内の客達はそれぞれに、おしゃべりしたり一人で黙ってグラスと向き合っていたりしている。僕は、深みのあるシングルモルトの香りと音楽に思わず目を閉じた……。

夢はどこから始めたのか、見ている本人にはわからないものだ。そして、人は苦々しいものを手がかりに過去を振り返るものらしい。希美との出会いで一番心に引っかかっているのは、どうしてあのとき「指輪は、約束」だなんてことを口にしたのか、ということ。あの一言が希美の人生を変えてしまったのではないか、という後悔だった。そのことが希美から誘いがあると断れない理由かもしれなかった。僕は好きな音楽や音響の機材に囲まれて生きていれば十分に幸せだし、パートをしている妻も小学生になったばかりの娘も平凡な生活をしているから、何の過不足もない。たまに希美のような若い子と、音楽のことを話しながら飲むのは、望外の幸福な時間だった。

「この店の音響機材は気に入っていただけましたか？」突然、オーナーが声を掛けた。「ああ、いいですよ。今度ここでライブがあるときは、是非聴きたいなあ」「謙虚な方なんですね」とオーナーがくすくすと笑った。髪はオールバックでテカテカと整髪料が光っている。ブルーの光はやや弱くなったけれど、アルコールの炎のようにゆらめきながら全身から出ていた。その光に見とれていると、「この店でライブがあるとき、オペレーターをやっていただけますか」「えっ、仕事の話し？」「いえっ、もちろん仕事もお願いしたいのですが、必要でしたら真藤さんにこの店の機材をいつでも自由にお使いいただきたいのです。好きなときに遊びに来てくださって結構ですよ」僕は怪訝な気持ちになった。（この怪訝「けげん」という気持ちがわかってもらえるかな？ 彼に騙されているような気がする一方で、同時に好意的な友情を示された気もするとい

う状態だった。)「どうして、ですか?」「何がです」とオーナー。僕は酔った勢いを借りて思い切って訊いた。「あの、ここを気に入っても、初対面の僕にそんなに親切なことはいわないものでしょう」「ですから、初対面ではないんです。あっ、来ましたよ」「え」「真藤さんのお友達」

ドアの前に、希美が立っていた。「あ、真藤さーん、いらしてたんですか。こんなに早く来ていただいて、ありがとうございます」「先に飲んでましたよ」「長くお待ちになったんでしよう?」「いいえ。おいしいウイスキーと音楽で、ちょうどいい気分になってましたよ」希美は笑顔を返しながらとなりに座った。オーナーが丁寧にいう。「何を飲みます?」「真藤さんと同じもの」「かしこまりました」と答えたので、僕は思わずカウンター越しに視線を移す。オーナーの手の動きをもう一度見ようと思ったのだ。すると、となりからも、その手に注目している光があった。希美だった。その、目から温かな深紅の光が放たれていた。しかし、気が付かないふりをした。すると、希美はまじめな声でいった。「真藤さんのお陰です……」びっくりして僕はふり向いた。「なにがです?」

「この指輪、憶えていますか」と希美は左手をカウンターの上に置いた。その薬指に青く光る指輪が見える。それは、決して高価ではないラピスラズリの銀色の指輪で、見覚えがあるものにも、五年前に希美が目の前で外し、あのバンドのボーカルの男の子に渡してくれと託された指輪だった。(あっ)と僕は心の中で叫び、オーナーの顔を見た。彼は青白いの光につつまれて希美と僕をみて微笑んでいる。

「あの…、あなたは僕が指輪を返した…あのボーカルの子?」彼は、頷いた。

そのとき、不思議なことに指輪から青白い炎が立ちのぼった。それは、オーナーが放つ光と同じものだった……。

第二話「 蠍 (さそり) 」

その子が店に現れたのは四月の桜が咲いたころだった。小さな本とショルダーバックをカウンターに投げ出し「ブルーハワイ」と、ぶっきらぼうに注文したので印象に残っている。「かしこまりました」とバーテンダーは棚から一本の青黒い液体の入った瓶を取り出し、その直後、「へえー、本物使ってるんだあ」とその子は驚きの声をあげた。僕は、いつものようにカウンター端のスツールで、確か甘くないソーダ水を飲んでいたと思う。二人のやりとりに興味を覚え、見ていると「お客さま。よくご存じですね」とバーテンダーはその瓶をカウンターの上に置き、出来上がったカクテルのグラスに桜の花びらを数枚貼りつけた。その子はすこし笑顔になり、「これ、花から作るのよ…」と誰にいうでもなくつぶやいた。僕も飲みたいと思ったが、もうすぐ仕事だったので賞味できなかつたけれど、こんど試してみようと思った。その子が一口飲み、その反応を見てバーテンダーはようやく笑顔になり、甘く煮込んだサクランボの皿を出して「どうぞ」とその子と僕にサービスしてくれた。サクランボの皿をはさんで、その子は僕を見て「あなた、ここでマイクの係をやってる人でしょ。よく見かけるもの」と話しかけてきた。

僕はこの町で「ヨロズ音響屋」をやっている真藤という四十五歳の家庭持ちだ。フリーの音響

技術屋なので夜も昼もない。一週間も仕事がないときもあれば一ヶ月間休みなく働くときもある。夜中から仕事が始めるときもあるし、朝まで仕込み（準備）のときもある。不規則な生活だが、自分ではきわめて平凡な人間だと思っている。だが、一つ変わっているのは、ときどき人の身体から発光する光が見えることだ。それがオーラかどうかわからないし、何の光でどうして見えるのか調べたこともない。いつも見えるわけではないし、他人に見えるかどうかわからないので誰にも話したことはない。話しても誰も信じてくれないだろう。そう思っている。

ところで、この「ヒップ」というライブハウスの店には、ときどき不思議なお客がやって来る。いや、不思議という表現は正確じゃないかも。僕にとって、不思議な光をもつ客、というべきかな。そのブルーハワイの子が「わたし、何やってるふうに見える？」と訊いたとき、僕にはその子の左肩から紫の光がぽつと昇るのが見えた。もちろん服の上からだった。「ああ...、普通のOLかな」「どうして」「別に変わった職業ではないようだし、それに肩のタトゥーは素敵そうだし」と口からポロツと言葉が出てしまった。「え.....」と、その子はちょっと驚いたけど、すぐ微笑みをかえした。たぶん、自分は思ったより酔っていてタトゥーのことを話したことを忘れたのだ、と思い込もうとしたのだろう。「あなたは信頼できる人ね。この蠍のことは、これまで二人しか話したことがないから、三人目...」と自分の左肩を見た。そして「私、あのシンガー好きなんだけど」と目で示した先に、今夜のシンガーがいた。年に二三次ヒップにやって来るブルースバンドのメインボーカルで、タカシという名前だった。しかし、どう見てもタカシは四十歳を越えていて、その子とは親子ほども年齢差があるように思えた。ファザコンかなと思ったとき、その子は僕の心を見透かすかのように「わたし、童顔なの。これでも三十二歳」といった。へえーと思ったが顔には出さなかった。「昔、あの人と付き合ってたの。もう何年も追いかけて...ようやく付き合い始めんだけど...別の彼女ができちゃって...。ほら、あそこにいるでしょ」と伸ばした指の先に、落ち着いた感じの三十代の女がバックを膝に置いてコーヒーを飲んで見た。見るからに俗世間に不似合いな、どこかのお嬢サマというふうな子だった。

九時になったので、僕はその子に会釈して仕事にとりかかった。「終わったら、一緒に飲もう」と背中に声を掛けられたが、聞こえないふりをしてサウンド・ブースに登った。そこには昨日やっていたDJのミキサーとLP数枚が置いてあった。夕方のリハーサルどおりにマイクのフェーダーを上げ、エフェクターのツマミを回す。タカシは、ベースとドラムスとリードギターの三人と共に舞台上がって客席を見回した。僕の方を見たとき小首をかしげた。何かが違うという顔をしたので、なにか操作を間違ったかなと手元を見たが、打ち合わせどおりだ。舞台に目を戻すと、なんてことはない。客席の誰かとアイコンタクト中だった。（これから唄う曲は、お前のためにやるんだぜ）という顔。相手は見るまでもない、お嬢サマ。曲はオリジナルのブルースで、スローテンポ。歌い出しは「君の面影は、いつもまぶたに.....」というフレーズだ。これを唄われた恋の相手は胸がきゅんとなるかもしれない、そう僕が思うほど想いがのっていた。二曲目はドラムスが小気味よい案外ハイテンポな曲、三曲目がタカシのギターだけで弾き語りだった。前半のステージ最後の曲が始めたとき、僕は、このタカシという男が、あのお嬢様サマへ向け

て唄っているのではない気がした。他の誰かに想いを向けていることが、なんとなくわかったのだ。音響卓を操作中のオペレーターには、演奏しているアーティストが何を考えているか、どれくらい情熱を込めて唄っているか、そうしたことが客席にいる熱狂的なファンよりもわかるときがある。もちろん、マネージャーやディレクターなんかの冷静なスタッフには、もっとわかるものだ。歌を冷静に聞いて操作している僕は、タカシが確かにお嬢サマへ向けて真心をぶつけていないことがわかった。タカシは、本当はカウンターの前彼女を意識しながら、しかも無視を装っているようだった。

仕事が終わリマイクの片付けをしていると、タカシはお嬢サマのとなりで熱々ぶりを見せつけた。きっと、嫉妬のかたまりになった元彼女や周囲にむけた演出だと思う。タカシが持ち歩いているボーカル専用マイクをクロスにつつまれみ、返しに行くと「真藤さん。今日はとても良かったよ。とても唄いやすかった。ありがとう。則子も俺の声がキチンとしてたって」と彼女の肩を抱いたまま顔を見た。お嬢サマの名は則子というのか。感想を促されて「はい。とっても……」と嬉しそうに答え、顔を斜めにして僕を見ながら会釈した。人間は、嬉しいことを嬉しいと表現しなければ気が済まない生き物なのかな。特に恋をしている人間はそうらしい。則子が僕の仕事に本気で満足したとは思えなかった。タカシの元彼女と僕がしゃべっていたから、そんなお世辞をいったくらいの見当はつく。（ま、可もなく不可もなしとするか…）と思い「どうも、ありがとう」と会釈を返してカウンターへ歩いて行った。そこに手招きする女の子がいたからだ。

元のスツールへ戻ってくると「あたし、鏡子っていうの。はい、これ」と、コースターにのせたカクテルを差し出す。「これ、私のお友達」と微笑んで。「えっ？」という、バーテンダーが説明してくれた。「これは、テキーラのスコープオン・ブルーをベースにした当店のオリジナルです」と「三十八度よ、とっても強いんだから」と鏡子がろれつ回らない舌で補足した。「鏡子さんのお気に入りなんです。蠍…」と、バーテンダーは一本の瓶を目の前にゆっくりと置いた。なるほど蠍のシルエットがラベルに斜めに印刷してあった。飲んでみると、オレンジと二三のリキュールを少し垂らしあるようだが、きわめて強いテキーラ独特の味が口の中で痛みとなって「うっ！」と唸った。鏡子は「馬鹿ね、塩をすぐ舐めるのよ」というと塩の入った小さな皿を湿らせた左手の指を水のグラスに突っこみ、引き上げると塩の皿に押しつけてから僕の口に突っこんだ。マニキュアこそしてなかったが、女の子の指を舐めたのは初めてだった。唾液がリキュールを中和してくれたことより、鏡子のとった行動が僕をうろたえさせた。「どう？」と指をゆっくりと抜き出し、鏡子はその指を見つめた。それから、鏡子は「マスター、スコープオンをちょうだい」と注文した。その「スコープオン」というのは、ラムとウォッカとオレンジとレモンを入れたカクテルなんだが、その強いのを二杯飲んで、鏡子は完全に酔いつぶれたように見えた。まだ、タカシも彼のバンド・メンバーも飲んでた。

僕はどうしようかと、思わずタカシのほうを見た。すると、タカシは僕を見るなり両手を合わせ合掌しながら小さく頭を下げた。心の中で（ゴメン）と謝っている。僕は手を左右に振って（そんなことないです）と否定した。四十五歳になって若い女の子の酔っぱらいに驚くほどの純情さは持ち合わせていないが、鏡子の話し振りや酒を飲むときの威勢のよさは男を惹き付ける。飲

む相手としても話し相手としても面白いというえに、見ていてハッとする表情をふりまいて、それがとても新鮮だった。昔、鏡子のような女の子が何人かいたが、いまどきでは珍しいタイプだろう。カウンターに自分の腕枕で酔いつぶれた鏡子を見ていると、昔のことを思い出した……。

独身の頃、とても気になる女の子がいた。飲みっぷりも付き合いも男のようで、誰にでもわけへだてなくなく気さくに話してくれる女の子だった。彼女は行き付けの喫茶店に毎日のようにやってきては、年下や年配の男達と談笑し一緒に酒を飲みに行ったりボーリングをしたりゲームしたりして遊んでいた。そして誰もがその子を好きになった。そのころ、僕は音響屋を始めたばかりで、仕事がないときはその喫茶店で時間をつぶしていたから、当然、その女の子と顔見知りになった。そのうち僕がその女の子に恋をした。他の客と同様に扱われたが、その女と付き合い二人でドライブに行ったりして一緒に過ごす時間が多くなった。僕は、何でも思った通りのことを口にするその子が好きだった。結婚して独占したいと思った。それでそう告白したら、「私にはたくさん友達がいるから、だめね…」と一笑に付され、この二人だけの話が喫茶店の常連客にもれた。客の中に年下の男の子がいて、姉のようにその女の子を慕っていたので、僕が結婚を申し込んだことを知ると、彼は全身をふるわせて不安のような戸惑いをその子に訴えたいらしい。僕とその女の子は結婚するらしいよと聞き、彼はとうとう僕に直接訴えてきた。「独り占めしないでよ…」その言葉は忘れない。あんな恐怖におののく男の目を見たのは初めてだった。急に熱が冷めた僕は、何の理由も告げず、女の子に「俺はもう君と付き合わない」と一方的に告げた。それから、その子がどうなったか知らない。ただ、男なら誰もがその子を好きになるくらい魅力のある女の子だった。もう、十五年前のことだ。当時、その子の気持ちがよくわからなかったけど、いまならわかる。その子はバンプだった。男を虜にさせる女の子だった。それは、蠍のように毒針をもつけれど、男なら一度はその毒牙にかかってみたいと思う、そんな女の子だった……。

鏡子は急に顔をあげて、僕の顔を見た。そして「ねえ、どうして私をそんな優しい目で見ると？」と訊いた。彼女の顔がキスするように接近してきたから恥ずかしくなった。正直に「たぶん、昔付き合い合った女の子によく似ているからだろう……」と答えた。鏡子は小さく頷くと右手をのばし、指で僕の右肩に触れた。それから、その指先を自分の左肩へ動かして撫で始めた。そして「私のタトゥーと同じね」というと、縫い目にそって布地をつかみ、（ビリビリ！）と引き裂いた。鏡子の真っ白な肩があらわになって、そこに棲んでいるタトゥーが見えた。肩の落ちるところに、紫の体長五センチくらいの蠍がいた。それは白く淡い光をまとって、燃えているように見えた。蠍は、本当に生きていたのかもしれない。いや、白いオーラの中で、蠍は毒牙とハサミがあることを悲しむかのように、鏡子によりそって泣いているようだった。僕は思わずその蠍に触れ、やさしく撫でた。すると蠍はピンク色に変わり、やがて深紅になって紫に変わった。僕は今見ている光のことを話そうかどうしようか迷っていると、鏡子は「真藤さんって、まるで私の…」といいかけて肩を隠すと、僕の耳元にささやいた。「……タカシとは今夜でお別れ。もう、タカシの前には二度と現れないわ。そう決めていたの。ありがと……」僕はどんな表情を

すればよいのか困った。鏡子は「それじゃ」とバッグを手に立ち上がった。そして僕の分まで支払いを済ませると、タカシをふりきるように出て行った。

鏡子がいなくなった店の中は、うっすらとした青い光につつまれていた。光の中で、タカシは憑きものが落ちたような、素っ頓狂な顔で突っ立っていた。それは、安堵でも悲しみでもなく喜びでもない、複雑な気持ちの中で戸惑う男の顔だった。

(そうだ)僕は二十年前のことを思い出した。

(あの子と別れたとき、その不可解な気持ちの中で、「もしも僕がアーティストなら、きっとすごい音楽を作るだろうな」と思った...) もちろん、僕はその代わりに別の女の子と結婚したんだけど.....。

タカシはお嬢様と結婚するのだろうか、それとも音楽を作るのだろうか。

鏡子が残した文庫本がテーブルに残されていた。取りあげてみると、それは誰もが知っているナボコフの有名な小説だった。

第三話 「 ピアノ 」

フリーの音響技術者をしている僕は、人口二十五万人という県内第二の地方都市に住んでいる。街には文化ホールが大小三つあり、いろんな変わった仕事が舞い込む。その夜、僕はクラシックのコンサートですこし風変わりな仕事をした。反響板をセットしたホールの舞台なら、ヴァイオリン一丁でも電氣的な音響設備の補助がなくても十分に観客の耳や肌に伝わるのだが、どういう訳かそのアメリカからきたヴァイオリンのソリストはマイクを要求したのだ。本来、音響の拡声装置などクラシック音楽には無縁のものだったが、アメリカでは屋外や反響板がない会場でもクラシック・コンサートがよく催され、電気音響を使うことが普通に行われているらしい。出征兵士達へ慰問の演奏会が多くなされた影響があるのかもしれない。そのソリストは、交響楽団とまでいかないが弦楽器二十人の楽団と来日し、自作の弦楽協奏曲を演奏する演奏会のソロ部分で、エコーのかかった音を要求したのだった。そのため、楽譜が読めて、二日間のリハーサルとゲネプロ、それに本番の三日間を付きっきりで仕事ができる音響屋を、しかも一日一万五千元円の予算で雇うことになり、僕にその仕事がまわってきたのだった。ギャラは少ないが仕事の内容も少なかった。第二楽章のコントラバスがゆっくりと低音部を奏でる中、ソリストはヴァイオリンに付けた小さなマイクの音を特殊なエコーマシンで加工し、〈幻想の夢の音を背後から聴く〉という楽譜に書き込まれたことを電子的に実現するのがすべてだった。ソロの部分はおよそ九分間。楽譜に指示されたところでボリュームを打ち合わせどおりにゆっくりと上げてゆき、途中でややエコー成分を多くし、ソロの最後でゆっくりと減少させ、〈現実が、ゆっくりと舞い戻るように...〉生の音に徐々に近づけてゆく...という仕事だった。ただ、リハーサル全体を通して耳を慣らしてくれることが条件だったので、こんな簡単な仕事でも引き受ける音響屋がいなかったのかもしれない。三日間も通訳のとなりでほとんど無為のままリハーサルに立ち会い、ずっと彼らの現代音楽を聴いていなければならないのは、この仕事がどんなに好きでも、普通の音響屋にはかなり辛い仕事だろう。幸い、僕は十二音階の現代音楽が嫌いではなかったし、二十代のころか

らケージやシェーンベルクの十二音階や無調の作品はかなり好んで聴いていた。

仕事が終わって帰る途中、急に「ヒップ」へ行く気になった。終演後、客席背後の二本のスピーカーとケーブル類を撤収する片付けは十五分で済み、ギャラをもらってホールを出たのは午後九時頃。時間を持て余した気持ちになりはしたが、それがヒップへ向かう理由ではなかった。

リハーサルの一日目が終わったとき、ソリストが「この街に音響のすばらしいバーはないか？」と訊いたので、（まさか行かないだろう）と思いながらヒップを紹介した。そして今夜、本番がはねたあと「センキュー・シンドウ。シー・ユー・レイター！」と握手してきたから、（まさか）と思ったのだ。彼が泊まっているホテルからヒップまで歩いて五分。僕は反対方向へ歩いていて落ち着かなくなり、踵（きびす）をかえしてヒップへ足を向けた。とりあえずビールでも飲みながら、今夜は一時間くらい遊んでいこうと思ったのだ。

店に入るなりバーテンダーに「昨日アメリカの演奏家なんて来なかったよね？」とコンサートのパンフレットを見せると、「あ、この人。昨日来ましたよ」とあっさり答えた。あのソリストがこの店でどんな音楽を聴いたのか、興味を覚えた。「今夜も来ると思います。そうやってました、英語で。あ、もしかしてウチを紹介したのは、真藤さん？」「うん」と頷いたものの、ソリストが僕の仕事をどう思ったのか気になり、グラスがいつもより早く空になる。三杯目を注文して飲み始めたとき、ガヤガヤと何カ国語もの言葉が入れ混じった団体がやってきた。ソリストが半ダースの演奏者と通訳を連れてやってきた。ソリストは僕を見つけるなり「シンドー！」と抱きついてきた。そして、それぞれが思い思いのボックス席やカウンターで飲み始めると、ソリストはステージの片隅にあったアップライトのピアノを弾きたいと僕にいった。英語は片言しか理解できない僕としゃべるのに疲れたのかもしれない。顔見知りの店長代理にいて、プログレ風なヨーロッパのロック音楽を止めてもらい、ピアノの前にあったギターアンプをどけ、ピアノの天蓋と鍵盤の蓋を開けた。国産のピアノではなかった。東ヨーロッパの国で作られたピアノだった。仕事が終わってから、また仕事に付き合わされるとは思わなかった。仕事で身体を使っていなかったから、欲求不満を解消するには都合がよかったのだ。

ソリストは、鍵盤をあらかたスケールで試し弾きすると、まあまあのチューニングだね、という顔で僕の方を見た。僕が親指を小さく立て顔の前に出すと、彼は小さく頷いてから鍵盤に向かった。速い指使いの、たぶんベートーベンのピアノソナタの中の一曲と思うが、アレグロらしいのを弾き始めた。硬質のゆるみのない音楽が店内に響きわたり、他のお客もびっくりしたように聞き入った。四～五分間の演奏が終わると、大きな拍手が起きた。ソリストは一度頭を下げながらピアノの蓋を閉め、席へ戻ってきた。そして大きく息を吐いて、こういった。「日本人はどうして芸術のために芸術をやらないのだろう」そして、チェリストの女性と話していた日本人の通訳を指で来いと呼ぶと、僕に、すこし長い話しを始めたのだった。

……三年に一度ヨーロッパのある都市で開催される音楽コンクールの予選を、彼が指導していた一人の若い日本人がピアノ部門で勝ち抜いた。すぐれた演奏技術を持ち、独創的な芸術性をもっていたのに、その日本人はスポンサーになってくれた楽器メーカーのピアノを選択したという

。コンクールには、いろいろなメーカーのピアノが十五台用意されていて自由に選べるのに、中でもっとも新しいメーカー製の、まだ評価の対象にもなっていない新しいピアノを選択したのだった。それが、ソリストには信じられなかった。いや、気に入らなかったのだ。旅費や滞在費をその楽器メーカーがスポンサーとして負担したせいだと、ソリストは憤りを噴出させた。なぜ、一流の音と評価されているメーカーのピアノを使わないのか……。ブラームスのピアノ曲を、あんな明るさだけの音でしか鳴らないオモチャのような音で弾けるはずがないと分かっているのに……。

ソリストは話しながらブランデーの入ったグラスを数杯飲み干していた。かなり酔った顔付きになって、通訳が「発音わかんないや...」と苦笑いしたとき、二重になったドアから一人の女性が入ってきた。彼女は店内を見回しソリストの姿を認めると、待ち合わせでもしていたように僕らの席にやってきた。そしてソリストの前（つまり僕の横だ）に腰を下ろした。ソリストは彼女の顔を見て、信じられないという驚きの顔で立ち上がり、「マチコ！」と叫んだ。そしてぼかんと口をあけたまま、これが夢でないことを確認するかのようにあたりを見回した後、彼女の最初の言葉を耳にした。

「まさか、私のこと話していたんじゃないでしょうね」と彼女はいった。その顔に見覚えがあった。「あの、もしかしてジャズピアノを弾いてる弓野さん？」「ええ。むかし、アメリカでこの人に師事していたの」（師事するという言葉は、若い人はよく知らないだろうが、その人から教えることだ。それも、弟子として個別な教える場合に使われる。）弓野真智子は、この町のジャズピアニストとして洋楽好きな人で知らない人はいない。アメリカで修行してきた本格的なジャズ・ピアニストとして、東京や関西方面のイベントにも毎年出演しているし、僕もこの町で何度か音出しの仕事をしたことがある。真智子は僕を見るなり、「あなた音響屋の真藤さんでしょ。去年のクリスマス、ホテルのショーで音響やっていただいたわ」ソリストが横から英語で何かいう。「あのヴァイオリンの音、真藤さんがPAしてたの。ふうん……」通訳は、自分の出番がなくなったことを察し、さっきまで話していたチェリストの席へ戻っていった。僕も席を立とうとしたら、真智子は「よかったら、私の話しを一緒に聞いてもらえませんか？」「えっ、僕がですか？」何の話しかわからないまま、僕はその場から動けなくなった。

ソリストと真智子は無言のまましばらく互いを見つめ合っていた。それは緊張というより、別れた恋人同士が何年かぶりに再会し懐かしんでいるふうに見えた。二人の会話を部分的に訳してくれた真智子の話によると、八年前、アメリカの音楽学校に留学した彼女は、音楽理論を教えたこのソリストと出会い、すぐ恋に落ちたという。ソリストは、真智子を二年間教え、三年に一度開催されるヨーロッパのコンクールへ送り出した。そして「それで、あんなったの」と説明したが、なぜそのピアノを選択したのか、僕には訳がわからなかった。

「私、本当は昔からジャズやりたかったの...」「えっ...」「真藤さん。ヨーロッパの古典音楽って好き？」「ええ……まあ……聴きます」「私、クラシック、やりたくなかったの。どんなにうまいといわれても。でも、それでアメリカに留学できるならって、嘘ついてクラシックを弾いて

もいかなって思った。アメリカはジャズの本場だし、いっぱいジャズ聴けるし、演奏家だってファンだってたくさんいるしね」「それなのに、どうして？」真智子はしばらく黙り込み、ソリストを見た。

「この人を好きになってしまったのよ。それで、クラシックやめられなくなっちゃったの。だって、この人、私のピアノの音をとて気に入ってくれて、本当にいろんなことを教えてくれたのよ」そういう真智子の顔を、ソリストは見つめていた。それまで、およそ恋人同士とは見えないほど違和感が漂っていたのに、急に親密なものに変わった。真智子は、小悪魔のような笑みをソリストへ返して、いった。「この人は...かなら会いに来ると思って.....現代音楽のくせに.....無理して、こんな地方都市へやって来たのよ。だから.....」真智子は声を詰まらせた。でも顔を伏せることはなく、二筋の涙の片方がグラスの中に落ちていた。「私、会いに来たの.....」

それから僕にこう訊いた。「この人の今日の演奏、どう思った？」僕は答えた。「とても良かったです。クラシックの響きを身近なものにしようという気持ちが、ストレートに感じられました」「真藤さんって、本当に音楽が好きなのね.....。うらやましい」「いえ、心を感じない音楽が嫌いだけです。どんなにうまくても」といって恥ずかしくなった。僕は、あわてて大好きな黒ビールを注文した。それからしばらく、二人は囁（ささや）くように英語で話した。そして僕を見て、真智子はいった。「この人、六年前、私がどうしてあのピアノを選んだのか、その理由を私の口から聞くまでは帰らない、ていうの。どうしたらいいかしら？」どうしてそんな話を僕にするのかわからなかったが、思わず言葉が出た。「あのお、ひとついいですか？」「ええ。なに？」僕は即座にいった。「あのピアノで、コンクールの曲を弾いてはどうですか」「え？あのピアノで？」と真智子は舞台上のソリストが弾いていたピアノを見た。

このあとヒップで起きたことを、僕は生涯忘れないだろう。

真智子は「そうね」というと、ソリストの手を引いてステージへ上がった。ピアノの前に座わりソリストに背を向けると、鍵盤に向かった。ソリストは戸惑っていたが、音が鳴りはじめると彼は驚くあまり凍りついた。曲は、ブラームスの「四つのバラード」作品十番、第一曲目の「エドワード」という曲だった。数年前、僕もグレン・グールドのCDで何度か聴いたことがある。演奏は、静寂な夜にゆっくりと波打つように浮かび上がる感情が、次第に起伏を激しくしながら描かれる運命の響きが、店中を瞑想のための伽藍（がらん）へ変えたように、みんなを圧倒した.....。僕は目を閉じて聴き入った。いや、その音の宇宙の中に漂った、と表現すべきだろう。しかし、それは真智子がソリストの生徒として演奏した最後の音楽だった。

真智子が最後の和音を弾き、音の余韻が消えるまでの十数秒間、ヒップはまるで真夜中の教会のような静謐につつまれた。僕が最初にこの曲を聴いたのは三十歳くらいのときで、働いていた東京のホールでヨーロッパから来た演奏家のリサイタルだったと思う。たしか第二曲は第一曲とは違和感を憶えるほど雰囲気は違ってはいたはずだ。真智子は第一曲だけ弾いて鍵盤の前を離れた。僕は、まぶたをゆっくりと開けた。.....誰が、店内を紺のライトだけで照明したのだろうかと思

った……。いや、それは、いま弾いたブラームスの音楽が店中の人に働きかけ、すべての人が放射している紺色の光だった。僕は、ときどき人間が放つ不思議な光が見えるが、こんなのははじめただった。すべての人が紺色の光を放射しているとは……。ソリストは信じられないという顔で真智子を見ていた。酔いは醒めていた。拍手をすることも思いつかないすべての客が呆然と立っている中、「さよなら……」と真智子は棒のように立っているソリストに告げ、舞台を下りてきた。僕の前を歩いてドアへ向かい、ノブに手をかけ「あたし、もう二度とこんな音楽は弾かないわ」といって店を出て行った。

第四話「月」

中秋の名月の夜、介護老人も受け入れる七階建ての高齢者向けアパートの屋上で、月見の茶会が催されることになった。そこでチェロのソロ演奏があるから音響をお願いしたい、と友人からの依頼があった。ただし条件がふたつ。ギャラは一万円で、プロ用の音響機材はなし。その仕事を引き受けたのは二つの理由からだ。一つは、演奏者が恩田祐介だったから。恩田は関西のオーケストラに正式なチェロ奏者として籍を置きながら、単独でポピュラーや唱歌などを演奏したり、邦楽やジャズの演奏家と共演したり、依頼されると楽曲も書く。僕は、その多彩な演奏を一度聴きたいと思っていた。それと、もう一つの理由は、しばらく僕に仕事のない日が続いていたから。小学生の娘が一人、カミさんのパートの稼ぎは多くないから、つまりその仕事を引き受けるしかなかった。

前日の十四夜。月が昇ったところに演奏会場の屋上を下見した。ここは本当に市街地の中心なのか、と思うくらい静かだった。屋上は老人が一人で散歩しても安全なように、一メートル高の手摺りを兼ねたコンクリート壁で囲まれている。そのため下界の交通雑音は遮断されていた。しかし、どうやってチェロの音をPAしたらいいか、二十分ほど悩んだ。結局、このアパートの食堂にあったカラオケセットの三点セットを運び上げ、自分の仕事用ダイナミック・マイクを背の低いブームスタンドに取り付けることにした。テストでエコーは適当に絞り、スピーカーをコンクリート壁の半分の高さになるようブロックを重ねて置き、ラインで自分の声を吹き込んだCDをポータブルCDプレイヤーで試したら、思ったより忠実に自分の声が屋上中に鳴り響いた。マイクの調子を試し、これで雨さえ降らなければ月の下で、お茶会のとなりでライブは大丈夫だ。そう信じて帰宅した。

しかし、野外のライブは「天気、電気、元気」の三拍子がそろってうまくいくものだ。本番の日の天気予報は、夜は快晴で満月のマークが出ていたが、午後から低気圧が接近し強風が吹くという。じゃ、屋上はとても寒くなるということか、と考え厚めの服を着込んで四時に家を出た。案の定、午後から吹き始めた風は次第に強くなり、止む気配がない。主催者の福祉アパートのオーナーが悩んだあげく、予定どおり屋上での茶会を強行することになった。ちょっと待ってよ、と思う暇なく、強風の中で僕はウィンドウ・ノイズと終始苦戦するハメになった。茶会は六時から始めるので、五時三十分からチェリストのリハーサルをやった。「風。大丈夫ですかね」とい

いながら、恩田祐介はエレベータで運び上げたハード・ケースから楽器を取り出すと、僕がセッティングしたステージに見立てたコンパネ半分の上の丸い椅子に座りながらいった。「真藤さん、でしたっけ」「はい」「五、六年前、大阪に来たでしょう」「え？」「僕は憶えてますよ」大阪……という、確か津軽三味線とチェロが共演したコンサートの音響をアレンジしたことがある。そのときのチェロ奏者が恩田だったのか、と思った。「あのとき、ときどき曲も作るっていったでしょ。だから憶えてるんです」と金髪の下で笑った。あのとき、髪を染めていなかったのか……と思い出した。

「ところで、ここが終わったら、どこか録音できる場所ありませんか」「録音って、どんなのです？」「普通の演奏ですよ。ほら、あの月を見てご覧なさい」と指さした先に、低くぼうっとした満月が浮かび上がろうとしていた。いい満月の夜になりそうだった。「あの月が本番中に僕の背中を輝きだしたら、いいメロディが浮かんでくる気がします。だから録音したいんです」「わかりました。何に録音します？」「何でもいいですよ。カセットでも、MDでも」「わかりました。用意しましょう」「お願いします」

本番は風との闘いになった。恩田祐介が演奏したのは、「月の砂漠」を含む昭和の唱歌を三曲、モーツァルトのセレナーデ、ジャズの「ムーンライト・セレナーデ」など十曲。名月の下での茶会はコンサートの内容とあいまって盛況だったが、風がお客の襟を立てさせ身震いしている姿があった。僕は、低音の調整ツマミを絞り、（ボッ…ボボッ…）という音をできるだけスピーカーから出さないように、音量ツマミを演奏の内容によって上下させた。つまり、風ノイズが目立たないようにずっと調整し続けたのだ。一時間近いコンサートは僕にとってあっという間に終わり、客は寒さを半分くらい忘れてチェロの音楽に酔いしれ、満足して帰った。

片付けをしていると、恩田が「ほんと、きれいだねえ」と楽器をかかえながら歩いてき見た。スピーカーの音が気になって月など見ていなかったが、顎を上に向けると、乳白色に染まった満月が煌々と輝いていた。「どこで録音します？」と恩田は訊いた。「タクシーで五分くらいのところに、ヒップというライブハウスがあります。そこでいいですか」「ライブ・ハウスか。客がいるんですよ」「はい」「いいですね。じゃ、もう一回ライブやらせてもらおう」「本当にいいんですか？ ギャラ出ないですよ」というと「もう、ギャラはもらったよ」と恩田は月を見上げながら独りごとのようにいった。どういう意味だろう、と僕は思った。恩田祐介はアパートの経営者からもらった出演料のことをギャラといったのではなかった。まさか、月からもらったのか？

人は何かを得ると、たいてい何かを失うものだ。恩田はまるで何かを支払うような態度でタクシーに乗り込んできた。店に着いて、いつもの階段を上り二重のドアをあける瞬間、彼はこのライブハウスの大きな空間に驚くだろうな、と思った。しかし、淡々とした表情を崩さずに、アルコールの甘い香りと煙草の臭いが入れ混ざった空気に気をとられていたようだ。屋外から密閉された空間へやってきて、恩田はこれからの演奏に集中しようとしているのだ、と思った。店長の姿が目止まる。「店長。こちらが恩田さんです」と紹介すると、店長は丁寧に「いらっしゃいませ。いいんですか演奏してもらって」と挨拶した。すると恩田は「はい。一時間くらい演奏

させてください。即興なので、これからすぐ弾きたいのですが…」僕も恩田と同様にストレスが溜まっていた。思いっきり音をPAできなかった音響屋のストレスだった。ヒップは小さなホールくらいの広さをもつライブハウスで、いつでも演奏できるようスピーカーも機材もセットされている。僕は、コンデンサーマイクから一本を選びブームスタンドにセットしてコードをつないだ。そして音出しで音質と音量とリバーブの調整をするため、調整卓のある入口側のブースに入り、恩田にチェロを弾いてもらった。彼は手近かにあったパイプ椅子をマイクの前に置き、楽器を取り出しチューニングするなり、いきなり演奏を始めた。僕はあわててバックの中からデジタル録音機を取り出してスイッチを押し、周囲に機器のない場所に置いた。

店内には十数人の客がいた。その中の一組のカップルが、店に入るなり僕の目を惹いた。いいわすれたが、僕にはときどき人の身体が放つ光が見える。それがオーラなのかどうかわからない。その光は普通の人には見えないらしい。いつも見える訳ではないが、いつ見えるかも予想できない。けれど、このごろ、なんとなく音楽とリキユールがある場所でよく見えるような気がする。そのカップルが僕の目を惹いたのは、店の片隅にいた二人の身体から、黒い影を帯びた黄色と赤の光が激しく交錯しながらうごめいていて異様に見えたからだ。見ると、女性はうつむいて目にハンカチをあて、男は唇を指でいじっている。見るからに別れ話だと思った。どうして別れようとしているのか。二人の身体から出る光が激しく色と形が変化していたから、僕は気になった。二人を隔てるテーブルには、細長いグラスに透明なリキユールが入ったものが、ふたつ置かれていた。

奇妙なことに、恩田もその二人に興味をもったらしく、楽器をセッティングするとき何度か視線を向けた。もちろん、暗い表情で沈黙を続ける二人が気にならないほうがおかしいが、演奏をまえにした恩田が意識することがあるのか？ と思った。意味ありげな視線を残し、彼が弓のツマミを回し弦にあて最初に出した音は、その二人を包み込むような優しく温かな春の風のような響きだった。音楽が始めると、すぐに録音機が正常に動いているかどうか確認し、そして音響卓での調整をどうやるか集中したが、鳴り響く音には何ひとつ問題はなかった。店内は素晴らしい音楽が響きだし、空気の表情までも変質したように、ヒップの音響設備はいつ使っても正常にうごいているし、録音機も問題ないなら、僕はその即興的な美しい音楽をただ楽しめばよかったです。だが、それはできなかった。僕の目に、不思議な光の変化が映ったからだ。恩田は目を閉じ、まるで楽器の中に眠っていたメロディを弾いているような表情だった。その恩田の身体からチェロを包み込むような白っぽい光が見えはじめたのは、演奏が始まって十分後くらいだった。それは、白いガスのような球体で表面が白く光っていた。そして、少しずつ大きくなり、恩田とチェロを包み込むまでになった。音楽は、恩田の心にある思い出を描いている気がした。

僕は、その白い光と音楽に魅了され、お客のことを忘れていた。目を閉じて僕にはその白い光が見えた。気が付くと、違う方向からも白い光が届いていた。それは、店の隅にいたあの男女が同じような光の球体の中にいて、それぞれが輝いていた。二人の身体から出る光は、おだやかにその白い光のなかで一つになろうとしていた。さっきまで、いがみ合っていた二人は、出会った頃のような気持ちを思い出したのだろう、と思った。恩田の演奏がデクレッシェンドし、ひと

かたまりの音楽が終わった。しばらく無言の間があって、拍手が起きた。恩田は立ち上がって深く頭を下げ、座り直してマイクに顔を寄せてしゃべり出す。

「出会いは、かけがえのないものです。中秋の名月の今夜、皆さんと出会えたことをとても嬉しく思います。今日は、僕にとって特別な日なのです。ついさっきまで、この町のあるビルの屋上でコンサートやってました。屋上は、とてもきれいな満月が輝いていて、僕は十年前のことを思い出しました。その思い出を表現したくて、皆さんの前で演奏させてもらってます。よかったら、最後まで聴いてください」

恩田は、弓を構えると、いきなり激しく弦を叩くように音を出し始めた。いままで聴いたことがないチェロの音だ。中国かモンゴルの弦楽器でこんな演奏を聴いた記憶があった。弦が強くはじかれ、空気をビュンビュンと切るような音がスピーカーから飛び出した。それは、まるで不思議な空気のかたまりのように鼓膜より先に肌が感じた。録音機は精密な自動リミッター回路があるので、マイクの振動板がビリつかないかぎり音が割れることはない。音楽は、衝撃的な不協和音のフォルテから、悲しい情感をあらわし始め、美しい乙女の祈りのような旋律へ変わった。そのとき、ふたたび恩田の身体がチェロごと白い光につつまれたと思ったら、それは丸く大きな白い光の球体となり、その中にきれいな女の人が目を閉じて恩田に寄り添うように座っているのが見えた。目をこらしたが、それは確かに女性の姿だった。おそらく恩田が愛した人に違いない。けれど、理由があって二人は別れたのだ。恩田はその女性に想いをよせて弾いている。恩田は涙を流していた。それはおそらく死別だったのだろう。

演奏が終わり、演奏を焼き込んだCDを手渡すとき、恩田は両手でしかも強い力で僕の手を握りしめていった。

「真藤さん。ありがとう。音楽の中に私の愛する人が今も生きています...」

第五話 「 鳥 」

音符一つ改竄（かいざん）されるだけでも、自分の命にかかわることです。そういった作曲家がいた。

その朝、夜中までやった仕事の片付けのためにヒップへ行くと、一人の男が入口の間口の広い階段に倒れていた。男は泥酔しているか、気絶しているふうに見えた。肩をたたいて声をかけてみると、男はすっと起き上がり「昨日の音響さんですか？」と訊いた。「ええ」「あなたを待ってま